

## 胃がん発生と胃粘膜萎縮との関連について

○永山 大志、亀山 欣之、半澤 俊和、松井 志穂、遠藤 潤  
公益財団法人福島県保健衛生協会

【はじめに】近年、胃粘膜萎縮（H. pylori 感染胃炎）が胃がんの主な病因であるとの見解が広まっている。それに伴い、ABC分類などを用いた胃がん検診が実施されており、私達放射線技師も胃がん発生と胃粘膜萎縮との関連性について、知識を深めていかなければならない。今回、当協会で行った胃がん検診データを基に、胃がん発生と胃粘膜萎縮との関連を調査、検討したので報告する。

【方法】胃がんと判定された受診者のデータ5年分（2011～2015年）を用いて、医師指導の下、胃粘膜の萎縮度を評価した。萎縮度は「胃X線検査によるH. pylori感染診断アトラス 第2版」を基に、萎縮なし、軽度萎縮、中等度萎縮、高度萎縮の4段階で評価を行った。また、病理データにより、組織型を判別できるものは、それも考慮に入れて検討し、考察をした。

【結果】胃がんと判定された510名のうち、高度萎縮が369名（72.3%）、中等度萎縮が133名（26.1%）、軽度萎縮は8名（1.6%）、萎縮なしは0名であった。また、病理組織型を判別できた416件の内訳をみると、高度萎縮は分化型癌が80.9%、未分化型癌が19.1%、軽度・中等度萎縮は分化型癌が33.9%、未分化型癌が66.1%であった。

【考察】統計より、胃がんのおよそ7割は高度萎縮胃粘膜から発生しており、胃粘膜萎縮が進行するほど、胃がんの発生リスクが高くなることが確認された。また、病理組織的には、高度萎縮の胃粘膜からは分化型の胃がん、軽度・中等度萎縮の胃粘膜からは未分化型の胃がんがそれぞれ多く発生していることが分かった。分化型は比較的進行が穏やかで、病変は限局しているが、未分化型は周囲の組織への浸潤が極めて早く、非常に悪性度が高いがんである。従って、胃がんのリスクが比較的低い軽度・中等度萎縮の胃粘膜でも、そこから発生してくる胃がんの悪性度は高いことを考慮し、注意深く検査を進めることが肝要であると考えられる。

【まとめ】今回の調査により、胃がん発生と胃粘膜萎縮との関連の高さを再認識した。一方、低リスクの受診者にも、より重大な胃がんの危険性が存在することが示唆された。現在、胃がん検診が隔年受診へと移行していく中で、私達放射線技師は、より精度の高い検査の実施が求められている。今後も全ての受診者にとって有益な検査が行えるよう、また、胃がんで苦しむ方を一人でも減らせるよう、撮影、読影技術の向上に、より一層の努力を重ねていきたい。